

舞扇

三田 慶子

師走に入って最初の日曜日、加代は遅い朝食を済ませてから玄関脇の部屋へ窓を開けにいった。東京にいるひとり息子の浩史のためにとってある部屋だ。浩史は二、三年に一度ぐらいしか戻ってこないのだが、加代はせめて休みの日にはと風を入れてる。

遮光カーテンを開くと室内はほっとする明るさに満たされたものの、家具らしいものもない殺風景なようすをいやがうえにも見せつけられる。部屋は北向きで年中、日陰だ。そのうえ今日は北西の風が窓枠を揺すっている。

加代が一人暮らしをしているこの古い集合住宅は三階建てだが半数あまりが空き室だ。もとは白かった外壁も薄汚れて灰色味を帯び、寒々とした姿を曝している。北側には二十台分にちかい広さの駐車場もあるが車を止めている入居者は数人しかいない。駐車場と外の鄙びた道との境は低いブロック塀で仕切られ、敷地内に樹は一本も植わっていない。

駐車場の斜め前に踏切がある。それを東へ越してすぐのところは香川と徳島を結ぶJR高徳線の無人駅、宮の森である。香川県の県都、高松市の市街地を少し外れた場所だ。

カンカンとけたたましく鳴り始めた踏み切りの警鐘音が寒風に運ばれてきた。やがて遅ればせに電車の響きが鈍く加代の部屋に伝わってくる。

加代の勤務先は宮の森から二駅離れたところにある。電車通勤に便利なのが気に

入り七年前にこの二階、二〇五号室へ引っ越してきた。騒音も今ではすっかり耳に馴染んでいる。

今年も残すところひと月足らずになったというのに、浩史からは夏いらい何の連絡もない。加代は部屋の片隅に置いてある組み立て式パソコンラックの前に歩み寄り小ぶりの丸椅子に腰掛けた。

ラックの上には浩史が高校時代に使っていた古いノートパソコンが載っている。

加代はメールの画面を開いてみたが着信はなかった。特に用事もないのだが、もう待ちきれない気持ちになり浩史あてにメール作成を始める。

「お元気ですか。その後、お仕事は順調ですか。このお正月は休めるのですか」

加代はここまで打って前回とほとんど同じ文面だと気がつき指が止まる。夏のはきは「お正月」が「お盆」となっていたと思う。何か違う言い方はないものか。

加代は椅子に腰掛けたまま身体をよじらせて、足元に点けてある電気ストーブに冷えた指をかざした。外は陽が昇っているというのに気温はいつこうに上がってこないようだ。十二月からこれほど冷え込むのは、夫の亡くなった年の冬いらいだろう。

加代の夫は息子の浩史が十七歳のとき急性肺炎をおこして四十八歳で急死した。加代は保育士の資格を持っていたので現在の通信販売会社の社内託児所へ勤め始めた。自宅は夫が亡くなってから一年後に売りはらい、ローンの残金を清算して残りは息子が東京の大学へ進学する費用に充てた。浩史は卒業後も加代のもとへは戻らなかった。

毎年、盆正月が近づくと浩史にメールを送った。すると次の日には返信が届く。

「忙しいから帰れない」

その短い一行を穴のあくほど見つめ、無事でいてくれればそれでいい、と自分を納得させた。今回も帰らないと言うかもしれないが、いちおう訊いてみよう。加代は座り直してメッセージを仕上げ送信した。

天気予報では午後からは曇るらしいが、籠に溜まった洗濯物が気になる。室内干しになるのを覚悟で洗濯にかかった。洗濯機が回わり始めてから、ハンカチを入れていないのに気づき、居間へ戻りバッグから急いでとり出した。そのとき何か色鮮やかな小さなものが一個飛び出し足元に落ちた。見るとイチゴ模様のセロハンに包まれたキャンデーだ。

昨日、帰りの電車を一便遅らせて会社の近くのスーパーマーケットへ寄った。その折、小学一年生の美帆からもらったもので、バッグの隅に放り込んでいたのをすっかり忘れていた。美帆は以前加代が託児所で世話をしていた子だ。加代は床に転がったキャンデーを拾いあげ、手近な棚に置いた。

マーケットの店内は週末ということもあって混んでいた。加代は惣菜売り場のところでだれかに背中を触られたような気がして振り返った。見るとすぐ後ろに美帆が立っている。

「まあ、美帆ちゃん、大きくなって…」

加代の言葉に美帆はちよつとはにかんで嬉しそうだ。人ごみの向こうから加代を見つけて追ってきたらしい。少し息を弾ませている。

「加代先生…先生にこれ…あげる」

言いながら美帆は握りこんだ右手を加代のお腹のあたりへ押し付けてきた。手の中にはキャンデーが一個入っていた。加代は慌てて両掌で受けとめた。

「ありがとう。お家に持って帰ってから食べるわね…。お母さんと来たの」

美帆は託児所にいた頃より髪が長くなり左右に分け耳の上で可愛く束ねてある。

刺繍のはいったジャンパースカート姿で、すんなりと伸びた足にはタイツを履いている。加代が辺りを見回すと少し離れたところに母親がいて顔が合うと軽く会釈をした。加代もお辞儀を返す。美帆は母親のほうへ戻っていった。

そのあと買い物を終えた加代は店を出た駐車場のところで、また美帆親子と出会ってしまった。母親は美帆を託児所へ預けに来なくなってからもパート社員として勤務している。毎日、同じ社内にいるのだが加代は春らしい母親とは一度も会っていなかった。

「いつもここで面白い物ですか」

「ええ、家から近くて、便利だから…ちようど今日は、バレエのレッスンがあつて、今やっと終わって帰るところなんです」

母親は社外で出会えた気安さからか親しい感じの口調で答えた。美帆がバレエを習っているのは加代も知っていた。

「美帆ちゃん、頑張ってるんですね。もう何年になるのかしら…感心ですね」

母親は顔色を明るくした。

「三年になります。もうトウシューズを履いてるんですよ。春に初めてトウで立ったときは、白いシューズに血が滲んで大変でした。でも、この子、ますます熱が入って、今まで、レッスンは一度も休んだことないんですよ」

母親は片手を美帆の背にそっと添えている。バレエか……。今の自分には縁遠いものだ。練習はおるか劇場公演だって一度も観たことがない。加代は母親の説明に一

一つ頷きながら美帆に視線を落す。

美帆は長い睫毛をあげ黒い瞳を輝かせて微笑み、頬は冷たい外気に触れてほんのりと紅潮している。それがそろそろ宵の間に馴染んできた駐車場の水銀灯に照らし出され、小さな妖精を連想させる。夢中でレッスンしているうちに別世界のものに生まれ変わってしまったのかと、加代は不思議な思いに捉われた。この年齢だからこそそんな変身もできる。想像の世界に浸れる感性が関わっているからだろうか。

美帆の母親はひとしきりわが子の練習ぶりを披露してから付け加えた。

「春には発表会があるので、衣装の準備もまた始まります。発表会にはぜひ、おいでください。またその時、ご案内させてもらいますから……」

「えっ、発表会……」

加代は発表会と聞いてなぜか一瞬胸を突かれた。(楽しみにしていますわ)、という返し言葉がすらっと出てこない。加代はまだ先のことだからと思いついて口元の笑みで繕った。

自分も幼いときは美帆のように芸事に熱中していたことがある。加代の場合には日本舞踊だった。しかし当時、バレエも世の注目を浴びていた。

二人と別れてから加代はその頃に思いを馳せた。加代の育った町はさぬき市志度、高松から車で東へ小一時間ほどのところだ。瀬戸内海に面していて四国霊場の寺があり、昔は門前町として栄えていた。

当時、近隣の町村まで名が通った“みどりや”という三階建ての旅館があった。その旅館の若おかみ、千寿香は日本舞踊の師匠で、加代は三歳から六歳まで稽古場に週一回、母に付き添われ通っていた。しかし美帆のように血の滲むほどの稽古はし

ていなかった。母は習い事をどう考えていたのか知らないが、本人の加代は袖の長い着物を着せてもらえるのが嬉しくて心弾ませ入門したものだ。

稽古の演目は京の舞妓や寺子屋帰りのおませな町娘、貧しくても明るくひょうきんな子守の少女などだった。習い始めると加代はたちまち、その主人公になりきって幸せな気分になっていった。足のお滑りや首の傾げ方が巧い、呑みこみも速く覚えがいいなどと同じ年頃の他のだれよりも先生に褒められた。筋がいいと、大人の弟子たちからも認められていたものだ。

加代は急いで洗面場へ戻り、開いたままの水槽へハンカチをふわりと落とし入れた。洗濯ものを干し終わると、パソコンの着信メールを確かめた。つい一時間前に送信したところだ。浩史からの返事はやはりまだ入っていないかった。

“どう過ごしているのかしら…。どんな部屋に住んでいるのだろうか” 上京して最初に借りた部屋は高円寺の学生アパートだったが、三年ほど前に目黒のマンションに引っ越している。

(以上11月7日放送分)